

1年 算数科研究授業のまとめ（7月14日）

1 単元名及び単元の目標

のこりはいくつちがいはいくつ（5／7本時）

- ◎ 減法の意味と被減数が10以内の減法の計算の仕方を考え理解し、確実にできるようにするとともに、それをを用いることができるようにする。



【資料1 板書】

2 本研究授業の提案について

本時では、求差の場合の減法の意味や式の表し方を理解させるために、以下の二つについて提案を行った。

- (1) 導入において、1対1対応をして残りを取るという操作活動を絵を動かしながら行うことで視覚的に捉えさせるようにした。カエルと金魚という二つの事物をバラバラに提示し、並べて比べるという操作活動を行った。このことは、既習事項を確認し、本時の学習問題へつなげることができて効果的であった。児童は、本時の学習問題においてもその方法を生かし、プールでばらばらに遊んでいる子供たちを赤組白組ごとに2列に並ばせて比べれば何人多いかが分かることに気付くことができた。（資料1参照）
- (2) 説明する話型を提示し、それに合わせて話をしながらブロック操作を行って求差の意味を考えさせるようにした。これまでの「のこりは」という求残や求補の考え方から、初めて「ちがいは」「何人多い」という求差の考え方に入ったため、最初はどのようにしたらよいか戸惑いが見られたが、2列に並べたブロックを付けて1対1対応させる児童が多かった。それに合わせて、これまでに学習した「はじめに、～します。」「ブロックを○個動かします。」「△個多いです。」「答えは△人です。」といった話型を使いながら説明していた。求差の場合、同じ数のブロックを動かす、そのまま残ったブロックが「ちがひ」である答え方だが、ほとんどの児童は「ちがひ」に相当するブロックの方を動かしていた。これについては、全体発表やまとめの段階でどちらを動かすか説明し実際に操作活動を行ったが、操作の習熟は十分ではなかった。しかし、求差が引き算で求められること、引き算の式を立てて答えを求めることについては、ほとんどの児童が理解することができた。

3 本研究授業の授業技術課題について

- (1) 主体的に学習に取り組ませるには、本時の学習内容について見通しを持たせることが重要であると考えた。本時は、①自分で考える、②ペアで考えたことを発表し合う、③全体で話し合っただけを考えを深める、という進め方を予め示しておき、スモールステップで何をするか具体的に分かりやすく発問や指示を行うように努めた。児童は何をするのかが分かっていたため、集中して学習に取り組むことができていた。今回は、全体発表やまとめにおいて大型ブロックを使用して黒板で説明したが、より見やすく分かりやすくするには実物投影機等のICTを活用することが有効である。
- (2) 授業のねらいにせまるためには、一人一人の児童の実態をしっかりと見取り、個に応じた支援を行ったり児童の考えを意図的指名につなげたりすることが重要であると考えた。児童は初めて2列のブロックを操作したが、自分なりにブロックを動かしながら求差について考えていた。中には2列のブロックをどのように動かしたらよいか迷っていた児童も見られたが、個別に支援することにより、1対1対応で考えていくということに気付かせることができた。

4 次回の研究授業へ向けて

以上の点をふまえて、次回の研究授業では以下の点を意識した授業展開を考えたい。

- ・学習課題をきちんと捉え、考えさせる分かりやすい指示や発問の工夫。
- ・ペア学習における話合いや相互評価のさせ方。